高校生の言語意識について

尾西陽一

一

国語教師として与えられた課題は広汎にわたるが、対象となる生徒が、どのような言語に対する理解のしかたをしているのか、その探究にひたむきにならねばなるまい。国語教育は、ひっきょう言語を主体的に駆使できる人間の形成であり、言語能力の深化を目的として教育は営まれねばならない。

その前提となるのは、やはり、生徒がどんな言語意識を内にもっているのかについての研究である。

二

論を具体的にするために、生徒の作文の実例から考察してみよう。与えた題は、「ことばと人間」というものであった。

(1) 言葉。いつ起ったかわからないけれど、とても便利なものです。人はこれを持ったがために動物のように、意志を体で表現することなく、たくさんの人が集まっていても平和に暮すことができるのでしょう。もし人間社会に言葉というものが存在していないとすると、人は現代人のように複雑な感情を持つ事はできなかったでしょう。何故なら人はもともと単純な感情しか持っていないのです。

例えば赤ちゃんの感情は単純です。喜び、怒り、悲しみ、この三つの感情しか持っていないのです。しかしこの方が我々より幸せでしょう。彼らは憎しみという感情を持っていないのです。人は言葉の発生によって得たものは、おそらく愛と憎しみでしょう。複雑な感情は、この二つと前の基本的な感情がいろいろに派生し、混合され作り上げられたのでしょう。しかし言葉によって作られた複雑な感情は、現在言葉では表現できないものも現われてきました。

(何かわからなくなってきましたのでこのへんで止めます。)

（三年女）

この生徒の考え方の根本となるものは、人間は言葉によって愛と憎しみを得たという、言葉が感情を作り出すという論理である。この考え方の当否は論外として、一応、言語の機能を始源までさかのぼって考えようとする態度はうかがわれる。

(2) ものを考えるということは、むつかしい事、面倒なことと思われる。そして私は、物を考えるのは違人のやる事で、自分はたゞ偉人の言うなりに生活していれば良いのだと思うことがある。

パスカルは〻人間は考える葦だ〻といったが、その考え方は各個人によりさまざまである。人間はそのさまざまな考え方を尊重し、それゆえに人格や個性が生れるのである。

しかしものを考えるということにおいては、たゞぼんやりと瞑想にふけった所ではなにも考える事はできない。考えるためには言葉が最も必要な道具ではなかろうか。我々がどんな事を考えるにしても、そこには言葉が使用されている。言葉なしでは、物を考えることは出来ないのである。

それから、又言葉は、自分の思想を他人に伝えるための道具でもある。

しかし、人間に言葉が生じなかったとしたら、多分近代に至る文化は起り得なかったであろう。我々は言葉の重要性という事を考えたことがあろうか。我々はたゞ使い慣れた言語を何の疑いも持たずに使用しているのであって、その重要性などということはおそらく考えたこともなかろう。（三女）

論旨の展開のしかたに稚拙なところがあるが一応、言語の機能について、

(1) 言葉により思考が成立する。

(2) ことばの伝達性

(3) ことばによる文化の形成

という三つの柱を立てて論じている点、まとまった考え方、認識に達しえているといえよう。

(3) ことばの起源などと言うものは省略して言葉の持つ意味、また、人との深い関係において考えてみることにしたいと思います。私達が日常何の意識もなく使用している言葉……何の抵抗も感ぜずにほとんど無意識のうちに口に出している言葉……それは古い歴史によって形成されているものだと思います。時代をさかのぼって考えてみますと、万葉人はその心の訴えを歌に託し、美しい言葉によって人の心と心とは通じ合い、一つの人間社会を形成していたものであろうと思います。そしてそれらは伝承文学として発達し、文化が進むにつれて古今集、新古今集の時代となり、万葉の単純、素朴さにかわり、優美なことばのあらわれとなって表現されるようになった。そして室町時代ともなれば、茶道につながる「わび」「さび」を表現する言葉が多く使用され、俳諧がさかえた。

すべてこれらは、その時代の人々の心そのままが、受けつがれて来たものだと思います。これらの事を考えると、私達がいかに言葉を大切にし、正しくそれを受けつがねばならぬかと言う事が考えさせられます。

今、新語ともいうべき奇妙な言葉がいろいろと流行していますが、それは若さのシンボルでもあり、社会の反映でもあろうと思いますが、やはり私達は美しい言葉を正しい心で表現して行かね

ばならないと思います。

「あの人はよい人だ」という意味の事を伝えるにしても、その伝える人によって言葉の使い方も違い、聞く人の心にそれぞれ違った印象を与えると思います。

美しい言葉を正しく使うという事は困難な事でありましょう。しかし、それを研究することによって教養を深め、みがかれた言葉をいかに使うかによって、その人の人間がより立派になるのだと思います。（三女）

ことばを人間の倫理性、道徳性との関係からまともに考えていこうとしており、さらにことばのもつ伝統性、その美しさ、言語効果などにも視点をおいている点、(1)(2)よりもより具体的な認識といえる。

(4) 決して天邪鬼な気持からでなく、言葉のない世界の人間のことを考えました。

もしも言葉がなかったら、人間はどうだったでしょう。きっともっと単純でもっと美しかっただろうと……

信じあうか、憎しみあうか、二つしか道がなかったら、どちらを選ぶでしょう。

事実と事実との間に、説明もなければ、言いわけもありません。信じるか、でなければ、突き放すだけです。会話には頭脳は必要でなく、心だけです。心と心がじかに触れ合い、その暖かさを通して信じあうのです。

ぎりぎりの線まで単純化され、浄化された感情が、しかし、決して、ある本質から離れることなく、人間と人間の心と心の間を まっすぐに往来するのです。

きっとどんなにかすばらしいことだろうと思います。（三女）

(1)の論旨と共通する点がある。非言語の社会を想像し、言語のない世界が「単純で、美しい」世界であり、以心伝心という心の触れ合いの機能のみに意味ありとする考え方である。非言語社会を想定し、それを美化して考える、いわば浪漫主義がそこにある。女子学生の考え方の一つの特徴をそこに見出すことがでよう。

以上、四例を記してみたわけであるが、いずれも、「言葉と人間」という題を抽象的に考察している点は共通性がある。与えたテーマそのものが、とりつきにくいという難点はある。しかし、私としては、もう少し、ことばを彼らの生活の中で、日常生活の場で考えてもらいたかった。生活体験の中から、ことばの生きた働きを記述してもらいたいと思ったが、結果は前に記したようなものになってしまった。

しかし、高校生としてその思考形式には一面的でしかも観念的な傾向はあるが、彼らなりに言語のもつはたらきに眼をそそいでいることは認められよう。問題はいかにして、その言語意識をより実践的方向に定着するかということになる。その掘り下げ、問題点の探究、さらにそれらに基盤を置いた言語教育の体系の樹立が企図されねばならない。

三

「言語意識」ということばを使ったのであるが、このことばについてもう少し吟味してみよう。定義めいた表現のしかたをすれば、言

語に対する考え方というのが簡易な言い方であろう。人間には言語に対して普遍的な理解の仕方が存在することは想定される。しかし、各人の思想のもち方によって、言語についての考え方もある程度の変容はまぬがれない。言語の認識の程度においていろ〳〵な相がありうるわけである。

〃高校生の〃という連体修飾語を加えたときには、高校生という世代の限定がなされ、思想の未熟な段階における言語についての考え方の実態を指すことになる。

ところで、ここでいう言語は、どのように考えるべきか。時枝誠記氏の説かれる、「言語は表現過程であり、理解過程である。」とする過程論にもとづく言語の機能的把握に従いたい。いわば、表現と理解の行為の中に内在する諸問題に対する認識の実態ということが「言語意識」であるとするわけである。従って、鑑賞という一つの理解行為における意識の在り方も探究の素材となりうる。

四

高校生の言語に対する意識の在り方をさぐるには、その研究法をよく吟味してかからねばならないが、今その方法論については考えないことにして、素朴な〃一側面〃を例示してみることにする。

白石大二氏の〃教育文法論〃にとり上げられている例文を参考にさせていただいたことを最初におことわりする。

同書に徒然草の一文「妻といふものこそをのこの持つまじきものなれ。」の大学生の口語訳例が記されているが、高校生に書かせたものをかかげてみよう。

（対象は高校三年で国立大学志望コースである。×点は屋西）

1 妻というものは男の持つべからざるものである。（一名）
2 妻というものは男が持つべきでないものである。（四名）
3 男は妻というものを持ちたいものだ。（一名）
4 男子は妻をもつものではない。（一名）
5 妻というものは男が持つべきでないものだろうか。いや持つべきものだ。（一名）
6 妻というものは子供の持つべきものではない。（一名）
7 妻というものこそ男子がめとってはならないものである。（一名）
8 妻というものは男が持つべきではないものであるよ。（三名）
9 妻こそ男がもってはならないものである。（一名）
10 妻というものはまあ男の持つべきものであるよ。（一名）
11 妻というものこそ男子の持つべきものでしょう。（一名）
12 妻というものは男の持つまいものだ（持つのがむつかしい）（一名）
13 妻といふものは男のもちたくないものである。（一名）
14 妻というものは、男が持つべきものである。（二名）
15 妻と名のつくものだけは男が持つべきものでないのである。（二名）
16 妻というものは私の持つことが出来そうにないものである。（一名）
17 ほかでもない妻というものは男性が持たない方がよいものである。（三名）
18 妻というものは（まあ）男が持つべきでないものである。（一

名）

19妻というものこそ、男子の持つべきでないものであるよ。（三名）

20妻というものは男の絶体に持つべきでないものである。（一名）

21妻というものこそ下劣な男が持たないであろうものであるよ。（一名）

以上のような解答が出されている。言語表現法の多様性に驚かされるしだいである。

さて、白石大二氏の示された大学生の例について関連をもたせながら考えてみよう。

一文の口語訳において、肯定的に解釈した

㋑妻というものは、男の持つべきものである。

否定的に解釈した

㋺妻というものは、男の持つべきものではない。

という、まったく相反する結果が出てくるところに問題がある。一つの判断が否定なのか肯定なのかという基本的なことばのみつめ方ができていないのである。ことばというものは言語主体の何らかの〝意志〟をあらわしていないものはない。言語主体の判断が肯定であるのか、否定であるのかという識別から言語の理解は出発するといってよい。しかし、古文の知識を与えることを重視している高校の国語教室において、右のような実状なのである。

大学生の場合にしても、

男と生れたら妻というものは必ず持ちたいものである

といった例が多く出されている。こういったことばの理解のしかたをしているという実態の把握、いわば肯定も否定も判別しえない生徒が多数いるという事実の確認からことばの教育は出発しなければならないのである。

次に語感に対する反応のしかたをみてみよう。

与えた問題は、

「鍵姫は丈夫で、はちきれる発芽期を迎えているが、弟の清信は十一才で病身だった」という文の誤りを指摘せよというものであった。

「発芽期」が「発育期」でなければならないと指摘したものは、四十七名中二十五名であった。彼等の答案は大体次のように分類できる。

㋑「はちきれる」を「はちきれそうな」に訂正する。

㋺「迎えている」とあるから、結びも「病身である」にしなければならない。

㋩「発芽期」を「青春期」または「成熟期」にする。

この三つの考え方が多い。

㋑の方は一応妥当と思われるが、㋺㋩は全く、ポイントはずれの答案といわなければならない。

生徒の語感には、「発芽期」ということばが、植物に使われ、人間の場合には用いたらおかしいのだという感受性がないかのようである。語感というものは、日常の言語活動の中で自然に体得されていくものである。蓄積された言葉の正否の判断力といってもよい。頭の中にもそういうものが、ほとんどないのである。だから、絶体がよいのか絶対がよいのか、相対がよいのか、相体がよいのか、わか

らない。文字についての感覚は少しも鋭敏に働かない。こういう程度で、源氏をよみ、枕草子をいくら読んでもあまり言語能力は身につかないのである。「ことばと人間」というテーマを与えれば、一応正論をものにする。しかし実際の言語の理解のしかたは右にのべたような状態である。なにか、そこに、均衡を失したものがある。こういう言語意識におけるアンバランスをもう少しさぐり求め、彼らの実態に即した国語教育を力強く展開しなければならない。

以上、研究とは言えないものになってしまったが、次の機会により研究らしきものを発表したい。

（38・1・23記）

参考にした本

一、時枝誠記著　国語学原論続編
一、白石大二著　教育文法論
一　興水　実著　国語教育原論

（大分県大分舞鶴高等学校教諭）